

特別講演「ユベオッ（続縄文）時代の概説」記録

日 時 2021 年（土）13 時 30 分～15 時 00 分
発表者 佐藤剛氏（和人の研究者・公益財団法人
北海道埋蔵文化財センター）
公開方法 Zoom によるオンライン配信
参加者 26 名

1.1 ヤウンモシリとは

北海道は様々な意味を持ちすぎている。行政的な区分であり、地理的な区域であり、歴史的には国郡制の回復を目指した明治政府の意図なども含まれ、多義的な呼称と考える。「アイヌモシリ」という表現もあり得るが、神の世界「カムイモシリ」の対義語になる「人間の世界」とでもいうべき概念であり、実態的な地理区分には適さないと考えている。そのため、本稿では北海道島を指す地理的区分として「ヤウンモシリ」島を使用する。

1.2 研究者としての「名乗り」

アイヌ民族出自の研究者やそれを背景として活動する人々は、少数者として「アイヌ民族」であることを表明するかしないかの選択を迫られる。一方、多数者である和人は自身の由来を表明すること自体を思いにのせることはないように見受けられる。この島について言及するとき

には多数者としての位置づけに自覚的である必要があるのではないか。「アイヌ」（アイヌ民族）と等置する「和人」（和民族）の表明は、具体的に文字として、言葉として表現する必要がある。そのような考えから「和人の研究者」として発表させていただいている。みなさんと共有したい。

1.3 続縄文文化研究

続縄文文化研究の到達点は 2010 年の『北海道考古学』誌上において、熊本敏朗氏によって整理されている。

その後の土器研究では鈴木信氏と大坂拓氏は江別太式と後北式を細分した型式について検討を行った。鈴木氏と大坂氏では、「型式」と「細分した型式」の認識に差異がある。「細分した型式」が高じてしまうと研究者間での認識に齟齬が生じてしまう。対話が必要だろう。

後北式の文様は擬縄貼付文などで構成されるものと主に帯状縄文で構成される「帯縄文系」がある。私は鈴木信氏と同様に江別太Ⅲ層の各文化層をそのまま編年に用いることはできないと考える。大坂氏のように「江別太式の全てを後北式に含める」との結論は承知できない。江別太式と後北式は混在しないため、形式的な独立性が高いと言える。これは高橋正勝氏（1984）

の意図でもあると考える。

1.4 弥生文化と恵山式

恵山式期は掘り込みの明確な竪穴住居と近接する墓域、盛土遺構などの定住的な要素がみられ、弥生文化・弥生社会が展開していた。

続縄文文化は縄文晩期に続くこの島の文化であり、続縄文文化初頭の道南部には道央部と共通性の高い土器群にくわえ、遊動的な要素が強くみられる。その後、下添山式・恵山式の時期に弥生文化化する。その後、後北B式、C1式の頃に再び続縄文文化化すると考える。

続縄文初頭土器群は在地縄文晩期社会の主体的な選択と考えられ、用いる道具を少数に厳選した、移動生活を中心とする遊動的な集落社会と考えられる。続縄文社会は総じて遊動的な集落社会の文化・時代である。後続する前期擦文式土器様式を用いた文化は作り付け竈をもち、定住的な集落を基盤とする社会と位置づけられる。

1.5 「続縄文時代」呼称

古墳時代や弥生時代などと等置する考え方からは「ユベオッ（続縄文）時代」とすることが必要である。横山英介氏らの「続縄文時代」の時代区分に疑義を示す立場もあるが、日本列島における固有な島としての地域の歴史の解明には必要な時代区分だと考えている。

1.6 質疑

Sさん 遊動社会をもって続縄文の指標とする概念は面白いと思う。しかし、それは文化の説明であって、共存する諸型式の常時的組み合わせとしての文化の定義にはならないのではないのか。近藤義郎さんが述べられているとおり、特徴的な遺物の出現をもって画期を設定することから、遊動社会というだけでは画期を設定する

ことはできないと考える。続縄文文化を遊動社会として理解する考え方はわかったが、考古学における時代と文化の概念にのっとった説明をしなければならないと感じた。また、恵山文化を定住社会と考え、続縄文文化から外すという説明は理解したが、だからといって、弥生文化の中に入れることはなかなか理解できることではないのではないか。弥生文化は灌漑稲作の出現をもって画期を設定している研究者が多い。弥生的な部分があることは理解しても、弥生文化に含めることは難しいと考えている。

佐藤 私は考古学は歴史学の一分野と考えており、弥生文化、古墳文化の捉え方は様々あるが、ユベオッ文化は先行研究と本稿により説明されてきていると考える。弥生文化について灌漑稲作を指標とすることにはいくつか異論も出ている。弥生文化地域においても海洋民などは稲作をしていないと思う。時代区分も、これまでの研究とそれを特徴的に示す土器様式の検討から区分しており、ユベオッ時代を区分することは可能だと考える。考古学的な文化の定義は今後とも検討していく必要がある。歴史的にアイヌ民族を先住民族と考えた時、アイヌ文化期とか続縄文文化のような問題のある時期区分、時代区分ではないものを用語として使用してきた。私はその点が違うと考える。

Sさん 時代と文化を区分した議論が必要。東北の弥生文化も時代区分について指標が明確に示されたほうが良いと思う。

Sさん 横山（浩一）さんの型式はタイプのことを述べている。

司会 横山さんの型式の理解についてもう一度説明をお願いしたい。

佐藤 私の発表は横山さんの型式論をベースに考えている。型式を細分していくと再現性がなくなってしまうということを述べたかった。

Sさん 大坂さんと鈴木さんの議論が噛み合わないのは、そうした型式理解に齟齬があるからなのだろうと思う。

Tさん 続縄文の前半と後半の違いが大きく、縄文と続縄文との間の隔たりよりも大きいようにも思える。縄文と続縄文の内部の差異、また、本州の弥生とどう区分できるのかお聞かせ願いたい。

佐藤 縄文は定住的な土器群、続縄文は移動しながら生活する土器群と区分することができる。細別器種の構成が少ない続縄文の土器様式は遊動的な生活に適応しているものと考え。前期擦文式土器様式は6世紀末に成立したと考えるが、同時期の東北地方の土器様式と比較すると、細別器種が少ない。甕や杯はあるが、その量は少ないと言える。6世紀末の東北地方では稲作を行う地域がほとんどであり、定住的で稲作を行う律令社会と定住的でありながら狩猟漁労採集をする擦文社会に分けられると考える。続縄文の最後の段階は、縄文がつく土器までを続縄文と区分する方もいるが、細別器種にもとづいて区分する立場から、縄文がない段階でも細別器種構成が似た段階がある。

Tさん 恵山文化は器種が少ないのか。

佐藤 恵山文化は細別器種が多いと捉える。

Tさん だとすると、恵山文化が続縄文文化に属しているのはどのように捉えれば良いのか。

佐藤 私は恵山文化は続縄文の文化に含めて考えていない。

Tさん 本州の弥生文化が稲作の有無をもって弥生文化の区分を考えているので、そうすると恵山文化の位置づけが難しくなる。続縄文でも弥生でもない文化ということになるのかという感想を持った。

佐藤 なぜ本州島の区分をそのまま適用しなければならないのかという疑問はあるが、適用したとしても恵山文化は弥生文化の海洋民として

捉えて良いと思っている。

司会 恵山文化が海洋民だということは、土器からわかることではなく、その他の遺物構成から判断しているということか。

佐藤 弥生文化として土器様式でも区分できると考えるが、骨角器などの検討も先行研究があり、海洋民と考えている。恵山文化の総体は道南部にしかない。道央部には恵山式土器は客体的にしか入らない。縄文晩期の大洞 C1 式の土器は道央部まで広がっている。その時に社会の変化がどのように起きているのかはさほど検討されずに、単に亀ヶ岡文化の広がりとして捉えられてきた。恵山文化の場合は、盛土遺構や貝塚や掘り込みのしっかりした竪穴住居などは定住的な集落社会を示しており、稲作を行っていないだけで、同時期の本州北部の弥生文化のもつ遺構・遺物群と変わらない。

Tさん 本日の成果はぜひ論文として発表して、全体として共有していただきたい。そうしなければ、議論が深まらない。

佐藤 今回の発表は概説のため論考としてまとめきれていないので、すぐには難しいが努力する。それまでは本稿を参照していただきたい。

Tさん 博物館学芸員として、続縄文やアイヌ民族の解説で苦慮することがあり、参考になった。

司会 次の12月には本講演と同じく続縄文文化をテーマとした情報交換会を予定している。その際には何らかの形で資料集を公開したい。佐藤さんには講演内容を論文化していただくことを事務局からもお願いしたい。

佐藤氏講演資料を含む誌上報告資料は下記のURLからダウンロードできます。

<https://ishijunpei.github.io/dkouko2020/>

(石井淳平)